

わが家のお客さんを 「おもてなし」したいという心と 「もったいない」という精神で、 市だごは誕生しました。

益城町のスイーツ「市だご」の原点は、「来客を心からもてなそう」という気持ちでした。遠くに住んでいる友人、出稼ぎに出ていた息子、里の両親を招く嫁、娘の里帰りを待ちわびる母親。一年に一度のお祭りである初市の来客に「ようこそおいでくださいました」と差し出される市だごに、遠い旅路を想って来客もほっと一息つけたと思います。まだ甘いものが高価とされ、普通には食べることができない時代に「どうにか甘くできないだろうか」と工夫を凝らし、家庭ごとに貧富の差があっても、その家でできる最大限の材料と工夫で作られたそうです。

現代は飽食の時代といわれ、大昔から日本人の主食である米が少なからずも軽視されているように思えます。決して豊かではない時代の人たちの「もったいない」という精神は、たとえ砕けた米だろうと食べ物を粗末にすることはありませんでした。その気持ちが市だごには表れています。今よりもひと手間もふた手間もかかり、まっ赤に手を腫らしながらも作った市だごで来客をもてなしました。

「おもてなし」と「もったいない」。

真心で誕生した市だごは益城生まれ、益城育ちの「おもてなしスイーツ」です。来客の際にはこの一品で、最高のおもてなしをしてみませんか。

おもてなしの一品 —— 完

参考資料／益城町木山の初市と市団子の歴史（松野國策／著）